

「焚書を免れた」腐蝕書」の亡霊

—セピア色のロンドン市街古地図は語る—

鎌田とし子

焚書とは、「学問・思想を権力によって弾圧するための手段として、書物を焼き捨てること」であり、腐蝕書とは、ここではじめて使う造語で「土中に埋めたために腐ってしまった書物」の意で、本稿の主題をなしている。

印刷技術が未発達時代にあつては、本は記録や伝達手段として非常に貴重な物であつた。古くは始皇帝の時代、新しい記憶ではナチスドイツの焚書が思い起こされるが、本を焼かなくても抹殺するに足る「腐蝕による抹殺法」もあつたのである。私はその行為を目の当たりにした歴史の生き証人として、ここに書き残さねばならない。つまり、当時それほど貴重だつた書物がなぜ腐ってしまったのか、まして戦前でもなかなか入手できなかった「洋書」である。その顛末は、歴史の証人になつてしまった私が是非とも語らねばならない。

「大英博物館」の古地図

私の手許にややセピア色に染まつた古地図4枚組がある。紛れもない「ロンドン大英博物館」の入り口正面に堂々と飾られていたものと全く同じものだ。1990年度、夫と共にストックホルム大学の「スウェーデン社会研究所」に客員研究員として滞在していた折に立ち寄つたイギリスで、偶然見かけた古地図であつた。なんと私の手許にある地図と全く同じではないか、仰天すると同時に貴重な歴史的文書であることを再発見した瞬間だつた。

なぜそんな貴重な物を私が持っていたのか、話は半世紀も前に遡る。戦時中の昭和19年の頃の、私を含めた親一家の疎開地滋賀県の片田舎で起きていた貴重な書籍の大量抹殺、すなわち「焚書事件」と「腐蝕書事件」に戻らなければならない。

当時は敗戦の色が濃くなつた戦時中で、敵のB29戦闘爆撃機が頭上を何機も編隊を組んで飛び交う時代であつた。たまにはグラマン戦闘機が急降下してきて地上の市民を機銃掃射してくることもあつて、生きた心地がしない日々を送つていた。そんな緊迫した戦時中のことである。知られる通り厳格な言論統制がひかれ、国家権力は反戦思想特に共産党の思想をアカと称して特別に危険視し、それとおぼしき書籍が書棚に並んでいるだけで検挙されるという状況下にあつたから、国民は特段の神経を尖らせていた。戦後アメリカ進駐軍によって釈放された共産党の大物徳田球一や宮本顕治は網走刑務所で生き延びたと聞かぬ人となつた。父は黨員ではなかつたが、経済学の研究者だつた関係で、社会科学の書物は二階の床が抜けないかというほど沢山所蔵していたし、知人の中には特高にしょつ引か

れる人もいて、獄死したり釈放されても結核が重篤になって命を落とす人もいた。それはなりふり構わずで、本棚にそれと疑わしい書籍が並んでいるだけで検挙されるという苛酷さであった。なぜそんなに多くの洋書があったのか。父は東大法科を卒業するとすぐ「住友」に入社し、幹部候補生として2年間ドイツに留学した。その間、ロシア革命に興味を持っていたのか国境を越えて入手できた関係資料を入手、こともあろうに帰国後『若き露西亜』と題する書を出版し、往路船旅とは異なるシベリア鉄道でわざわざ大陸を横断して帰国したという念の入れ方であった。これでは住友の重役もたまったものではない。呼びつけられ「今後一切こうした本は書かない」との始末書を要求された。父はこれを一蹴し、「辞表をたたきつけて来た」といった人物であった。その後は倉敷の「労働科学研究所」で紡績女工の研究や労働者の職業別死亡統計をとるなどの研究に従事していたが、戦後は故郷札幌に帰り大学で教えたり私立大学を建てたりして100才まで生きた。武勇伝が多く、母は夫の度々の失業に悩まされた。

戦争と「危険」な洋書の山

ところで大量の洋書があった理由だが、留学当時ドイツは第一次世界大戦で敗戦国となり、多大の賠償金を課せられる羽目になりスーパーインフレに陥っていた。価値を失ったドイツ貨幣は首飾りに加工されて子供のおもちゃとして売られるさまであった。我が家にもアルミ貨幣の首飾りが持ち帰られていたのでよく遊んだものだ。そんなインフレが席卷する時代であったから、古本屋の書籍は低価格で棚ごと買えるほどだったという。選り取り見取りで欲しい本を買い集め、頑丈な特注の木箱に詰めてはるばる船便で送られてきたのであった。

送られてきた書籍の書名は知るよしも無いが、その多くは官憲の目をかいくぐれるような本ではなかったと推測される。7人の子を抱え、滋賀県の疎開先で大阪府庁で働く夫の帰りを待つ母にとっては、まさに恐怖の日々であったに違いない。

7人の兄弟は母の親戚を頼って分散して疎開した。私は当時高等女学校に籍を置く少女であったが、疎開先の盛岡で栄養不良から肋膜炎におかされ、母の許に帰って来て静養中の身であった。戦時中大阪に住んでいた一家は、空爆が激しくなるなか母の実家を頼って滋賀県の田舎に疎開していたのだが、7人の兄弟を分散する意味で私は伯母の家に、弟2人は集団学童疎開で、兄は学徒動員で家をあとにしていた。

初めて親のもとを離れた少女時代の心許なさは言うまでもないが、生き残るためにみんな必死であった。私が預けられた母の姉に当たる伯母は、鳥取に住んでいた。その夫に当たる伯父は高等農林の校長で、知事に次ぐ高い官位と聞かされていた。その長男は小児麻痺の身障者、次男と三男は男だということで奉られて育っていたから、貧しい身なりをした女の子は伯母の見えからか女中の家の子を預かっていると知人に紹介されていた。偉い伯母に恥を搔かさぬよう気を配りながら女学校に通学していたが、間もなく伯父が盛岡高等農林の校長として転勤したので、それに従って盛岡県立高女に転校した。ついでながら、

戦時中高等女学校を4回転校し、その間教室で学んだのはたった1年間で、5年あるはずの修学期間は戦時中だというので4年に短縮されていたのであった。

そのうえ戦時下の教育といえば、机上の勉強はすべて停止されており、校舎全体は軍服の縫製工場に変わっていて、唯一体育の時間だけ「軍事教練」として存在する始末であった。体育の教員は配属将校に代わり、女子学生にも厳しい「教練」を課した。朝礼は宮城遙拝から始まり、必勝祈願のあと日の丸のはちまきを締め、作業に取りかかるのだが、配属将校は「猛獣」のあだ名よろしく、容赦なく体罰を振るっていた。食べる物にも事欠く時代に「軍事訓練」を課され次第に弱っていたのであろうか、肋膜炎を発症し親の許に返されることになった。当時鉄道の切符は簡単に入手出来ないことは知っていたが、どのようにしてか父親が盛岡まで迎えに来てくれた。これで命は助かったと思った。

盛岡から母が疎開していた滋賀県まで、空襲を避けるために日本海回りの長い汽車旅であった。病身にこたえると思ったのか、途中温海温泉に一泊してようやく母の住む疎開先にたどり着いた。母は娘の身を案じ、何よりも栄養を付けなければと飼っていた鶏を潰して娘に食べさせた。母にとって殺生は初めての体験だったので「南無阿弥陀仏」と唱えながら夢中で首をひねっていた姿が忘れられない。「母は強し」である。

「焚書」から「腐蝕書」へ

疎開先は、農村の小さな一軒屋だったが、食料を得るには着物を持参したうえ平身低頭して買い求め、小さくなって暮らす日々であった。ある日起きてみると母が風呂の焚き口で全身を真っ赤に照らされながらももの凄い勢いで火を焚いていた。風呂の時間でも無いのにと不審に思ってよく見ると、なんと分厚い本をボンボン投げ入れて燃やしているではないか。いくら子供でも本を燃やすなどとはただ事では無いと驚愕した。当時の洋書は表紙の背が皮で覆われ書名は金文字で書かれた物が多く、本の内容はわからなかったが非常に高価な物であろうとは子供心にもわかっていた。驚いて非難する私に「お父さんを守るため急いで燃やさなければならん」と一蹴された。聞けば官憲の手が身近な友人にまで迫っているということであった。

それから3日間燃やし続けた。農家の風呂は五右衛門風呂という奴で、わらの束や薪をどんどんくべて湯を沸かす原始的な作りの物であった。ここで近所が騒ぎ出した。「疎開者の家で三日三晩煙突から煙が出ている、おかしい」と。仕方がない。そこで考え出したのが夜中に畑を掘って木箱ごと埋めることであった。木箱というのは、外国から船便で大量の本を送った時の特注品で、引っ越しの度に使ってきた代物でもあった。分厚い頑丈な木箱で、戦中疎開先で父方の祖母が亡くなった折に棺箱に代用したほどの立派な作りだった。近隣住民の邪魔が入って燃やせなくなった残り少なくなった本は、木箱に詰められ土中に埋められた。穴は夜な夜な母が一人で掘った。

戦争と文化的殺戮

掘り出した木箱が何箱あったか思い出せないが、ずっと後になって戦後父が新制大学を設立する際にこの洋書が役に立った事を思うと結構な数では無かっただろうか。子供たちの父親を官憲の手から守るために母が取った必死の闘いであった。それから間もなく敗戦のラジオ放送が流れた。7人の子供はみんな無事で母の許に帰ってきた。父も仕事を失ってやがて大阪から帰ってきた。

ここで本がどうなったかを知ることになる。父は烈火のごとく怒った。「何ということをしてくれたんだ」と。これだから女は——と言ってもあとのまつりである。母とて戦前の高等教育を受けた身である。本を燃やすことの重大性は承知の上で子供や夫を守るために必死でやったことだ。大げんかになったが母親の勝ちだ。みんな生きのびたのだから。

すぐさま裏の畑を掘り起こした。しかし土中は水が浸潤していて本を蝕み、紙はほとんどとろけていた。真ん中辺りに位置していた本は助かったが、土気色に染まった紙は乾くとボロボロと破れた。なんという無残な変わり果てようであろうか。皮の背表紙と金色に輝いていた横文字の重厚な書籍の姿はも早目には出来なかった。なんという無残さであろうか。

私はこれを「文化的殺戮」と呼びたい。本は畑からしみ出す水に長く浸かると、土気色になり腐っていく。しかし表装が布の場合は布の部分は残る。布だけ残るが台紙の厚紙部分は溶けるので、もはや本の体裁は無く、破れた布きれだけが力無くぶら下がる。なんという無残な姿であろうか。かつての威厳に満ちた本たちは号泣しているように見えた。これが「腐蝕書」の実像だ。私は「焚書」と「腐蝕書」のいずれも見てしまった数少ない生き証人となった。

それから何年かが過ぎた。戦後父は恩師から乞われて札幌に帰り、新制大学設立のために事務局長として奔走していた。私は子供を2人育てながら大学に入り直し、新たな人生を歩み始めた。子供の頃父が労働者の研究をしていた影響もあって、何時しか労働や生活問題に没頭するようになり、貧困研究にも足を踏み込むようになっていた。

文献に当たっていくうち、貧困研究の古典であるイギリスのチャールズ・ブースの『ロンドン市民の労働と生活』（注1）が無性に読みたくなった。国会図書館にはあるだろうが札幌からは遠い。つぶやきを聞いた父がその本なら家にあったが、新制大学申請の祭に寄付したというではないか。早速借り出しに行った。

しかし対面したその書は「腐蝕書」の一つだった。9巻のうち一部はとろけてしまっていたが、それでも図書目録の上では役に立ったのだろう。それは確かに存在した。私は歳月を重ねた後、貧困研究にたどり着いたことに運命を感じた。しかしぼろぼろに変わり果てた姿を見ると、父は「図書館に行って返して貰ってこい」と言った。幾星霜を経て、遠くドイツから持ち帰った本を研究に役立てようとする娘が出たことに感動し誇りにも思ったのではなかろうか。こうした経緯をへていま私の許にある。読める箇所は読んで論文「貧困研究における社会階層の概念」（『社会学評論』第20巻3号 日本社会学会 1970年）

の中にも引用した。

問題のロンドン市街の地図は、本の付属巻『MAPS』として紺色の布で覆われたサックの中にあった。色はセピア色になってはいたが、7階層に分けられたロンドン市民が地域ごとに4枚に分割されているところも、大英博物館の正面に飾られていたものと全く同一であった。各世帯は階層によって色別に表示され、一目でどこに貧困者が多く住んでいたかが判るようになっていた。貧困世帯は青、混合は濁ったピンク、普通暮らしはピンク、中間層は赤、富裕層は黄色に大きく色分けされていたが、貧困階層については更に詳しく、最底辺にある貧困層は「黒に見える濃い紺色」に、極貧層は「普通の紺色」に、貧困層は「明るい空色」に3分割されていた。こうした分類が出来たのは悉皆調査であったことを物語る。当時市当局の協力があったとはいえ、一軒一軒訪ねて聴き取り調査を行い、貧困世帯を特定していったブースの気の遠くなるような「実態調査」の成果がそこにはあった。何という瞠目すべき「実証研究」の成果であろうか。当時の大都市ロンドンで悉皆調査を実施した研究者がいたことに驚嘆すると同時に、研究者としての原点を改めて指し示されたような気がした。

いま私はこの地図を前にして、どうすればこの貴重な文化遺産が大切に保管され、かつ後世の研究者たちに有効に利用して貰えるかを試案している最中である。

注1：Charles Booth “Life and Labour of the People in London” Macmillan.1892

筆者：東京女子大学名誉教授・日本労働社会学会初代代表幹事